

本書は、現代哲学の状況を一目で概観しようとする門外の読者にはうってつけの「入門書」である。しかし、もちろんこれは危険な言い方であって、本書が哲学のまったくの初心者にとって分かりやすい平易な「解説」を行っているという意味ではない。そうではなく、本書は、著者のユニークな思索を展開することによって、期せずして(?)現代哲学の論争のまっただ中に位置してしまっているという意味である。したがって読者は、多少の忍耐と好奇心を持続させることができるなら、必ずや、現代において哲学が何をしようとしているのかということの正確な理解を得ることができるだろう。

本書が以上のような意味で哲学業界の静かなる喧噪(?)の中心に降り立ったという事情は、すでに三つの興味深い書評が本書に捧げられていることから伺うことができる。その中の一つで野家啓一氏(東北大学)は本書についてこう述べる。「一気に読み終えて、五月の薫風が身内を通り抜けたような一種爽快な印象が残った。それは、門脇氏がフッサールやハイデガーといった、ややもすればジャーゴンの藪に踏み迷いかねない秘教的なテキストに寄り添いながらも、……あくまで明晰に自らの主張を展開しているからである。……本書は、……自身の「反自然主義」の立場を細部にわたって入念に練り上げた労作である。その主張は一言でいえば「全体論的規範主義」とでも特徴づけることができる」(『創文』443号 2002.6)。さらにもう一人の評者、神崎繁氏(都立大学)は本書についての最初の印象をこう述べる。「……初め意外な、そしてすぐ続いて「やはり」という相反する印象を持ちました。「意外」というのは、「志向性」という概念を中心に、「知覚」、「言語の意味」、「行為の意図」という広範な主題をめぐって行われてきた学兄の現象学的な分析が、「理由の空間」という少なくとも哲学的な出自を異にする、しかも比較的最近の関心と用語によってとりまとめられていることの意外さです」(同)。現象学の巨人たちの解釈を行いながらも、その視点を分析哲学的な問題設定の中に求めるという本書の特異さは(といっても、過去の哲学者に対する「ここまで分かりました」式の解釈ばかりが哲学書となるわが国の研究動向こそが異様なのだが)、しかし三人目の評者、貫成人氏(専修大学)のやや冷めた観点からはこう捉えられる。「本書は、英米系言語分析哲学から光をあてることによって現象学を再読解する試みである。フェレスダールやモハンティ、スミスとマッキンタイアなど、無数にある類似の先行研究と本書が一線を画するのは、志向性をとらえる視線を大いに広げた点においてのことだ」(……)。

もし読者が本書の占める位置をすでに知っていたなら、むしろそこからこの三人の評者たちの微妙に異なる隔たりを確認することができただろう。では、本書はどこに位置するのか? 本書が現代哲学のさまざまな論争の中心にいと述べたのは、この種の書評にありがちな誇張なぞではまったくない。掛け値なしの事実である。その中心は、いくつかの激突しあう世界観や主張や立場が複雑に絡みあった緊張の場を形成している。例えばそこに交差する対立軸は、現象学 VS 分析哲学、規範主義 VS 経験主義、全体論 VS 還元論、原子論、理由 VS 原因、志向性 VS 因果性、真理の対応説 VS 真理の整合説、表象主義 VS 反表象主義、行為の解釈主義 VS 行為の因果説、志向的実在論 VS 消去主義、古典的計算主義 VS コネクションニズム、物理主義 VS 反物理主義、等々であり、しかもこれらの対立は二つのはっきりとした陣営で争われているのではなく、それぞれが互いに入り乱れている。つまり現代哲学の論争の中心は、互いに異なる方向に引き合う多次元のベクトルが構成する力の場なのである。しかしそうだとすると、この乱雑とも見えるテーマのとりちらかしを強引にでもひとまとめにして理解する術はないのだろうか。この沸騰し続ける議論の源を〈人間存在へ向かう自然主義〉と呼んでみよう。つまり、人間の存在のすべてを一つの自然現象として理解し説明しようとする動機、ミもフタもない言い方をすれ

ば、人間を徹底的に自然科学の対象と見なそうとする世界観、それこそがこの思想的擾乱に絶えることなきエネルギーを注ぎ続けているのだとしてみよう。すると、敵味方の判別が困難な小さな勝利や小さな敗北が、すべてこの世界史的な巨大な思想の転換の渦から湧きでてくるのがぼんやりと見えてくる。この粗野とも言える<自然主義>は、生物学的存在としての人間どころか、その手前で生きられているわれわれの日常、つまり科学や理論を遠いものとして感じているわれわれの普段の経験の層までをも自然現象の一部として捉えようとしているのだ。この<自然主義>がどこまで、またどのような仕方で成功／失敗するのは今後の哲学と科学の未来にかかっている。さてそうしてみると、いささかラフな見取り図によるとはいえ、ここでようやく本書の到達点を述べることができる。すなわち本書は、自然主義者と反自然主義者が現在ともに認めざるをえない共通の洗練された出発点を呈示したものであるが、本書が掲げ、また野家氏が期待を込めて読み込んだ「反自然主義」への本当の一步は今後に果たされるべき著者の約束である。

これは本書を貶めるための評言ではない。「そのような自然主義に対して、人間における科学的な世界把握と日常的な世界像のギャップを埋めるために、知覚や意味、意図や感情といった、あらゆる志向的な経験を、「理由の論理空間」のうちに位置づけようとするセラーズの試みに-----つまり、経験のうちに理由をもって留まり、これを内側から限界づけるという意味での「合理性」の概念の復権に期待が集まるのは、むしろ当然」(神崎)というスタンスを共有する本書の起点ははっきりしているし、「規範主義の旗幟を鮮明にすることによって自然主義を退け、また志向性の全体論的構造を浮き彫りにすることによって表象主義を批判する」(野家)というその目的も、本書はおおむね達成していると言っていい。また言語や行為の志向性を心の内部の仕掛けに還元しようとするサルやデヴィッドソンの議論を押し戻し、「カントからフッサールをへて自覚されつつあった「理由の空間」の考え方」を『存在と時間』のハイデガーこそが拡張深化させたのだ(本書、p.147)と鮮やかに解釈してみせた点でも本書は画期的である。しかし、本書の「物分りのよさ・行儀のよさ」が象徴的に示しているように、自然主義もしくは反自然主義にさらに深くコミットする者たちには、ある種の不満が残るのも確かである。一方では、本書は「知覚や時間性のダイナミズム、超越論性などに関する繊細な現象学的分析に親しんだ者にとっては物足りないものとうつつる」(貫)であろうし、他方では、論証的であるよりは直観的な議論の力によって「現象のくつきりとした像を試行的に描き出すことに専念」(本書、p.196)したがために、意図の自立性や言語の志向性といった具体的な問題に解答を与えきれていない、と見えるであろう。本書の<反自然主義>が本物なら、過去のテキストの解釈もさりながら、現在の哲学的問いに自前の反自然主義的答えを与えるべきであろう。本書の<反自然主義>がどれほどのものになるのかは著者の今後にゆだねられている、と先ほど述べたゆえんである。そこで少し調子を変えて、もっと形而下的に言いがかりを(?)つけてみよう(お三方の書評は、ひょっとするとその<格調の高さ>ゆえに、本書のテーマを神々の形而上学的争いだと読者に誤解させてしまうかもしれないので)。

いまから十数年後に(?)、哲学の世迷い言をすべて捨てて認知科学とロボット工学の専門家に転身した著者K氏が、初めての大事な仕事として、「朝食のトーストを焼く」ことを意図的に行うことができるようなロボットを作ることになったとしてみよう。(それとも、そんなことは原理的に不可能だ、というのがK氏の<反自然主義>だったのだろうか? その場合、意図的行為は、おそらくサルが言うだろうように、人間とその進化的な類似物だけに可能なく生物学的現象>なのだろうか?)。もちろん、そのロボットは、朝食やトースターやパンの焼け具合などに関して、うんざりするほど多くの常識的なことを知っておかなければならない。しかし、それよりも何よりもそのロボットは、誰かが「君はなぜそのトースターのスイッチを入れたのか?」と問いかけるのに対して、「トーストを焼くために」とその理由を答えることができなければならない。その行為は意図的行為なのだから、ロボットは自分

の与り知らないうちにトーストを焼いてしまっていた、などということでは困るのだ。どうしたら、それができるようになるだろうか。未来の K 氏は、かつて哲学の世界で一世を風靡した「行為の因果説」を思い起こして、ロボットに「トーストを焼きたい」という欲求と「この種の状況では、トースターのスイッチを入れなければトーストは焼けない」という信念とを授けることにした。欲求と信念の適切な結合が生み出す行動、これこそが意図的行為というわけだ。しかし、その欲求とその信念があったとしても、そのロボットの行為は意図的行為ではないかもしれないではないか。因果説の大きな難点、逸脱した因果連鎖の問題がすぐに K 氏の頭をよぎった。その欲求と信念をもったがゆえにロボットは初めての行為に興奮し、歓喜に震えたアームの先が思わずスイッチを押してしまうかもしれない。そこで K 氏は、「トーストを焼く」という行為の一部始終を統制し、因果的にその行為を引き起こし続けるような「トーストを焼く」という意図そのものをロボットに与えることにした。しかし、意図とは何であろう？ 毎朝の歯磨きのような意図的行為の場合には「歯を磨く」という意図らしい意図がとくにあるとも見えないのに、では意図がなくともいいかという、「トーストを焼く」ことについての適切な欲求と信念をもっていても「トーストを焼く」ことが意図的行為とはならないことがあるとは！ 悪戦苦闘の末、K 氏は昔の自分の反因果説の英知をようやく思い出した。意図とはある特別な自立した心的状態ではない、したがって、意図的行為とは意図によって因果的に生み出すことのできない現象なのだ。それで最終的に K 氏は、「トーストを焼く」という意図をロボットの内部状態として実現することを諦めた。

K 氏は、自分が逆説的で奇妙な立場におかれているのを感じていた。意図的行為は因果的現象に還元できない目的論的現象である。しかし自分は、その目的論的現象を因果的に作り出さなければならない。なぜこれが逆説的で奇妙かという、因果的に作り出された目的論的現象は、もはや存在論的には因果的現象に還元されてしまうからである。K 氏は多少のめまいを覚えながらも最善を尽くした。目的論的現象は何ら神秘的なものではない。多くの生物が目的に向かって活動し、生物のもつ多くの器官が一定の機能を果たしているとき、そこに目的論的現象は出現する。したがって、「トーストを焼く」という意図的行為のベースは、生物的な合目的活動が一般にそうであるように、プロトタイプの朝の状況でプロトタイプのトーストをプロトタイプ的に焼く、という機能を実現するメカニズムに他ならない。これは、意図的行為を正面からロボットに行わせるという戦略に比べれば、遙かにたやすい工学的課題である。しかしだとすれば、意図的行為の意図性はどうなるのか。再び不安になった K 氏の前に、二つの誘惑が姿を現わした。いずれもが反因果説に隠されていた禁断の木の実である。一つ目の誘惑は、合目的／機能的活動のすべては見方を変えれば「意図的行為」なのだ、と K 氏にささやきかける(デネット)。信じよ、そして「意図的行為」としてそれを解釈せよ。それ自体において本源的に意図的であるような行為は存在しない。すべては解釈である。したがって、そのロボットの意図的行為とは解釈者であるわれわれの見方の内のみ存在する、とそれは述べる。もう一つの誘惑は、真に「目標に従って目標にふさわしくふるまいを統制していく」ことは、行為者の意識的な方向づけを、それゆえ意識の存在を含意する、と述べる(ウィルソン)。もろもろの合目的／機能的活動のどれが意図的行為でありどれがそうでないかを見分けるには、まずそれが意識をもつかどうかを見定めよ。意図的行為を意図的行為たらしめている本質はその背後にある意識の存在だ、つまり、意識こそがすべての意図的行為のカギを握っている。だから、そのロボットに意図的行為を行わせるにはまずそれに意識を授けなければならない、とそれは述べる。

この二つのいかがわしいとしか思えない誘惑の前で大いに当惑した K 氏は、最後に最も重大なことを思い出した。それは、現象学と呼ばれる深い洞察がかつて K 氏に与えてくれた靈感である。それによれば、意図的行為は行為者のみがなすものであるが、何者かが行為者となるためには <現存在> であらねばならない(ハイデガー)。要するに、反因

果説のジレンマは空虚な二者択一にすぎないのだ。本当に存在するものは恣意的な解釈でも心的現象としての意識でもなく、現存在の〈可能性の企投〉である。例えば「その可能性は、プレイヤーの技能的なプレーを常に導き、プレイヤーがバスケットボールをすする状況と交渉するようなコンテクストを、形成し続けている。その可能性の企投は不確定である。…ゲームに勝つことについての不確定な仕方であられた可能性こそが、自らを一連のかけがえのない個別の行為へと完成していくのである」(本書、p.160)。なるほどそうであった。現存在の「不確定ではあるが分節化された可能性」が自らを完成していくこと、これが意図的行為に他ならない。K氏は、〈可能性の企投〉を工学的に作り出すことの絶望を味わいながら、かつて自分を導いていた偉大な思想をすっかり忘れていたことを深く恥じ、この神的とも(あるいは常識的とも)いえる深遠な洞察に心の底から祝杯を捧げた。もちろん、もはや「朝食のトーストを焼く」ロボットの制作のことなど眼中にはなかった。その後、研究所を去ったK氏の行方は杳として知れないという。

さて、少し頭を冷やそう。無い物ねだりの理不尽で不当な要求だということは百も承知で、今後の著者にあえてこう問いたい。ロボットが〈現存在〉となるためにはどうしたらいいのか？ 〈現存在〉の記述はもう十分だ。このストーリーがおぼろげに示唆するように、〈可能性の企投〉の実現のメカニズムでも具体的に解明しない限り、そうした記述は、やわな自然主義とやわな反自然主義を甘やかす安らぎの袋小路にしかならないからである。